

同性の観察者の存在が異性に対する自己呈示行動に及ぼす影響

笠 置 遊*¹

The Effects of the Presence of the Same-sex Observer on the Self-presentation to the Opposite-sex Partner

KASAGI Yu

Abstract

The purpose of this study was how the presence of the same sex observer effects on the participants' self-presentation behavior to the opposite sex partner. In this study, female participants were asked to talk with the opposite or same sex partner in the situation where the other female participant was observing on side. Also, we set the control condition in which no participants were observing on side was present. Results showed that participants in the control condition presented themselves more attractive in scores on physical attractiveness. On the other hand, participants in the multiple audience condition abstained from presenting themselves attractive in scores on physical attractiveness.

[Keywords] self-presentation, multiple audience problem, strategic behavior

問題と目的

自分にとって望ましい印象を他者に伝達することは、友人関係の構築・維持、仕事の成功につながる (Leary, 1995; Rosenfeld, Giacalone, & Riordan, 2002; Schlenker, 1980)。したがって、人々は他者にある特定のイメージで自分を知覚してもらおうように行動しようと強く動機づけられており、このプロセスを自己呈示 (self-presentation) という (Goffman, 1959; Nezlek & Leary, 2002)。

従来、人々は同性よりも異性に対する自己呈示に関心が高いことが示されてきた (Leary, Nezlek, Downs, Rad-Davenport, Martin, & McMullen, 1994)。人々は同性との関係において、仲間付き合い、サポートなどを得ている。一方、異性との関係においては、それらに加えて、ロマンチックな性的関係への期待や、外見的魅力、性的魅力などのわれわれにとって重要な次元における自己肯定的フィードバックも得ることができるからである。また、多くの人は、同性との関係を多く持っており、異性関係が不足しているため、経済的な意味でも異性関係はより価値があるといわれている (Reis, Senchak, & Solomon, 1985)。したがって、われわれは同性よりも異性に対して自分を望ましく見せようとするのである。

われわれが、外見的に魅力的な異性に出会うと、デート相手にしたいと思う (e.g., Leary, 1995; Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman, 1966)。しかし、異性との初対面場面では、その異性が自分のことを受け入れてくれるのかが分からない不確実な状況がほとんどである。そのような不確実状況に加えて、魅力的な異性との関係を開始したいと強く動機づけられることで、その異性から承認を得るために、自分についてのポジティブな印象を相手に与えようと努力するようになる (Rowatt, Cuningham, & Druen, 1999)。魅力的な異性に好意を持ってもらうために、人々は自分を競合他者である同性よりも自分の方が魅力的であるように見せようとする。例えば、男性は資源の誇示に関連した戦術を取りやすく、一方で女性は外見を向上させること (i.e., 化粧やダイエット) に関連した戦術を取りやすい (Buss, 1988; Clark, Shaver & Abrahams, 1999)。さらに異性の好みと参加者の自己概念が相反するという状況において、人々が異性の好みに合わせた自己呈示を行うことが示されている (谷口, 2001)。

* 1 立正大学心理学部助教

しかし、日常のコミュニケーション場面においては、コミュニケーションを行っている当事者の周りにも他者が存在することが多い。魅力的な異性への自己呈示場面に同性の他者が居合わせる場合もあるだろう。異性に対して外見的魅力を好ましく呈示することは、同性の他者からは異性獲得の機会が妨害されるとみなされ、否定的な評価を受ける (Buss, 1988)。このような異なる印象を与えたい相手が同時に居合わせる状況において、人々はどちらの相手に合わせた自己呈示を行えばよいかという複数観衆問題 (multiple audience problem) に陥る (Fleming, 1994)。笠置・大坊 (2010) では、魅力的な異性への自己呈示場面に同性の他者が居合わせる複数観衆状況において、異性に対して外見的魅力を積極的に呈示することは、同性の他者に否定的な印象を与える可能性があるため、人々の外見的魅力についての自己呈示動機が低下することが明らかにされている。しかし、具体的にどのような自己呈示行動が抑制されるのかどうかは明らかになっていない。そこで本研究では、同性の他者の存在が、魅力的な異性への外見的魅力に関する自己呈示に行動に及ぼす影響を検討する。

方 法

実験参加者

関西地区の国立O大学の講義時に参加者を募り、女子大学生133名が実験に参加した。観察者無し条件には73名 (平均年齢19.75歳, $SD=1.76$)、観察者有り条件には60名 (話者30名, 平均年齢18.77歳, $SD=0.72$; 観察者30名, 平均年齢19.00歳, $SD=1.11$) がそれぞれ割り当てられた。

実験協力者

参加者の会話相手として、観察者有り条件では大学生4名 (男性2名, 女性2名; 平均年齢22.50歳, $SD=1.91$)、観察者無し条件では大学生2名 (観察者有り条件の協力者のうち男女各1名; 平均年齢23.00歳, $SD=2.83$) に協力を依頼した。要求特性や実験者効果を排除するため、会話態度や会話内容について、あらかじめ十分な訓練を行い、服装の色や形も統一した。4名とも全参加者との面識はなかった。

実験計画

同性の観察者 (有りまたは無し) と、会話相手の性別 (同性または異性) を要因とする2要因実験参加者間計画であった。このうち、同性の観察者有り・会話相手が異性の条件は、本研究の焦点である複数観衆問題が発生する条件として設定した。

実験手続き

観察者無し条件 参加者は、実験室に到着した後、別の参加者のふりをして予め待機していた実験協力者1名 (同性または異性) の隣に着席し、実験が“初対面同士の会話の展開についての研究”であり、実験協力者と面識がないことを確認した。会話のビデオ撮影について了承を得た後、参加者は話者として、会話相手の実験協力者とお互いに親しくなるように教示された。その際、話者に実験協力者との将来的な相互作用を期待させるために、“会話の後に再度、2人で会話や共同作業を行う”ことが強調された。教示終了後、話者と実験協力者は約70cm 間隔で対面して椅子に着席し、9分間の会話を行った。会話の様子は、三脚で固定した3台のビデオカメラ (それぞれ、話者の上半身、実験協力者の上半身、両者の横全体像を撮影) で撮影された。最後にディブリーフィングを行い、再度会話や共同作業を行わないことを参加者に告げて、実験は終了した。

観察者有り条件 1回の実験には2名が参加し、実験室に到着した後、別の参加者のふりをして予め待機していた実験協力者1名 (同性または異性) の隣に着席した。その後、実験者から実験の内容についての説明を受けた。実験は、“初対面同士の会話の展開についての研究”であると伝えられ、参加者は2名ずつ順番に会話するように教示された。参加者は、実験協力者、およびもう1名の参加者と面識がないことを確認し、会話のビデオ撮影について了承した後、話者 (実験協力者と会話を行う) と観察者 (話者と実験協力者の会話を観察する) のいずれかの役割をランダムに割り当てられた。話者に割り当てられた参加者は、会話相手の実験協力者と約70cm 間隔で対面して椅子に着席し、お互いに親しくなるように会話をするよう教示された。その際、話者に実験協力者との将来的な相互作用の期待を持つように、

Table 1 実験デザイン

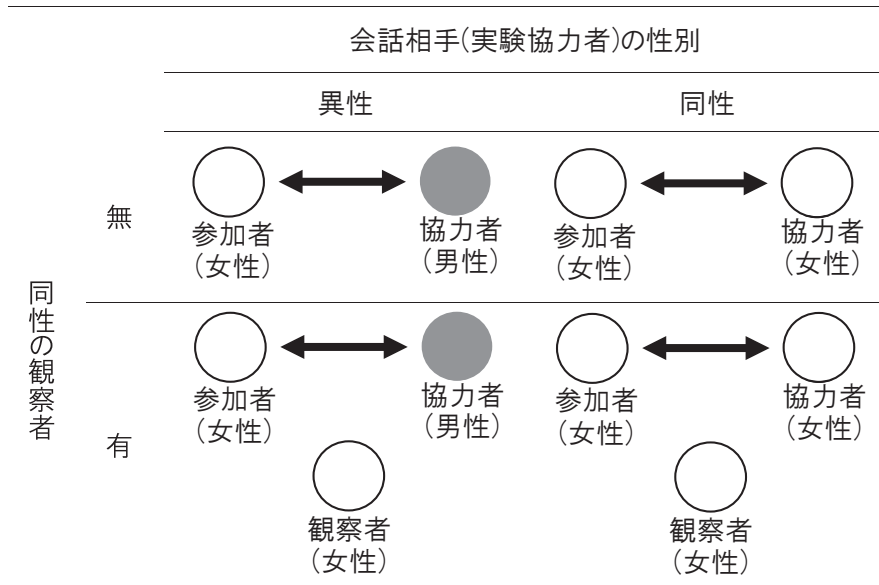


Figure 1 会話の様子

“会話後に再度、2人で会話や共同作業を行う”ことが強調された。また、観察者に割り当てられた参加者は、次に自分が会話する前に様子を把握しておくという理由で、話者と実験協力者から2m離れた椅子に着席した。その際、話者に観察者との将来的な相互作用を期待させるため、実験者から観察者に対して、話者の目の前で、“次のターンで、話者や実験協力者と会話や共同作業をする”と教示した。さらに、観察者を会話に集中させ、話者にも観察者に観察されていることを意識させるため、会話集用語に2人の会話の内容を質問するので、よく見ておくよう伝えた。すべての教示が終了した後、話者と実験協力者は9分間の会話を行い、その様子を観察者が観察した。会話の様子は、三脚で固定した3台のビデオカメラ（それぞれ、話者の上半身、実験協力者の上半身、両者の横全体像を撮影）で撮影された。最後にディブリーフィングを行い、再度会話や共同作業を行わないことを参加者に告げて、実験は終了した。

自己呈示行動の評定

コーダー 本研究の目的と仮説を知らない大学院生4名（男性2名、女性2名）が、コーダーとして、話者の自己呈示行動の評定を行った。コーダーは、話者の上半身のみが移っている9分間の会話映像を個別に視聴し、参加者が5つの外見的魅力に関するアピール行動（鼻にかかったような声を出す、語尾を引き延ばす、まばたき、甘え口調、上目遣い；笠置・大坊, 2012）をどのくらい行っていたのかを7件法（1：“全く示そうとしていなかった”～7：“非常に示そうとしていた”）で評定した。なお、各評定者に対する映像の呈示順序はカウンターバランスをとった。 α 係数は.82

であり、十分な内的整合性のあることが確認された。また、4名のコーダー間の評定一致率は、 $\rho = .73$ ($p < .05$) と十分に高く、分析にはコーダーの評定平均値を用いた。

結果

異性の会話相手に対する自己呈示場面を同性の他者が観察している複数観衆状況において、話者の外見的魅力に関する自己呈示行動が他の条件と比較してどのように異なるのかを検証するため、異性への外見的魅力に関するアピール行動5つのそれぞれについて、同性の観察者（有り・無し）と会話相手の性別（同性・異性）を独立変数とする2要因分散分析を行った。

鼻にかかったような声を出す 同性の観察者と会話相手の性別の有意な交互作用が見られた ($F(3, 99) = 45.82, p < .01$)。単純主効果検定の結果、同性の観察者がいないとき、会話相手が同性のときよりも異性のときの方が、参加者が鼻にかかったような声をよく出していたことが分かった ($F(3, 99) = 121.47, p < .01$)。さらに、会話相手が異性のとき、観察者がいないときの方がいるときよりも、この行動をよく行っていたことが示された ($F(3, 99) = 82.89, p < .01$) (Figure 2)。

語尾を引き延ばす 同性の観察者、会話相手の性別の主効果と交互作用いずれも有意ではなかった ($F(3, 99) = 0.00, ns$) (Figure 3)。

まばたき 同性の観察者と会話相手の性別の有意な交互作用が見られた ($F(3, 99) = 39.44, p < .01$)。単純主効果検定

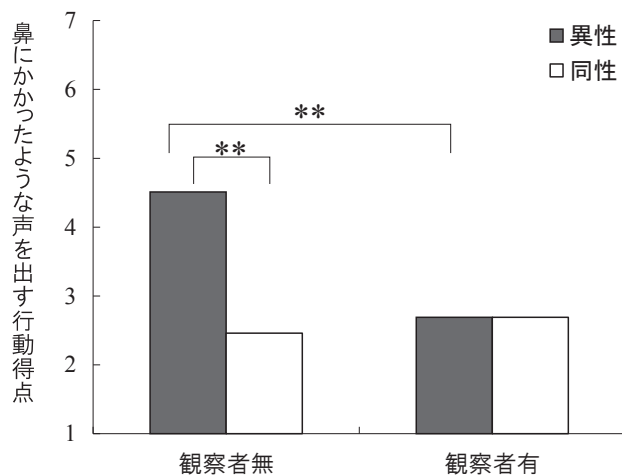


Figure 2 条件ごとの鼻にかかったような声を出す行動得点の平均値 (** $p < .01$)

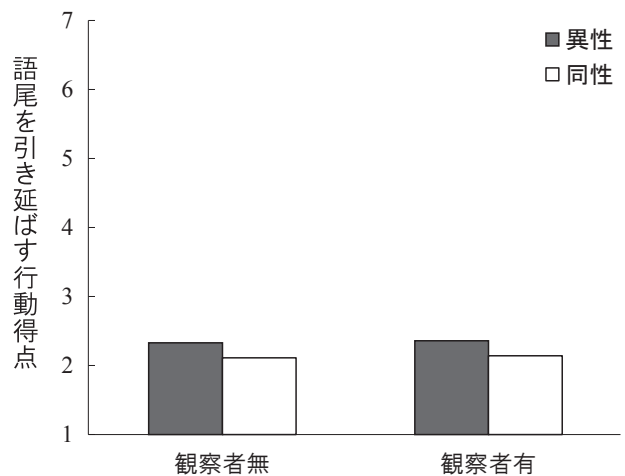


Figure 3 条件ごとの語尾を引き延ばす行動得点の平均値

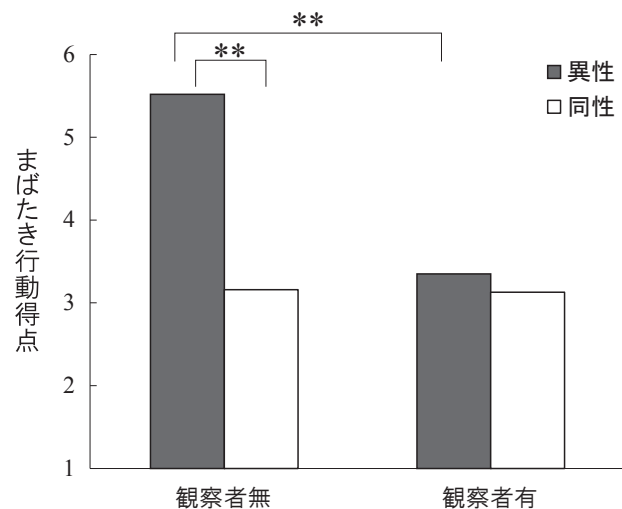


Figure 4 条件ごとのまばたき行動得点の平均値 (** $p < .01$)

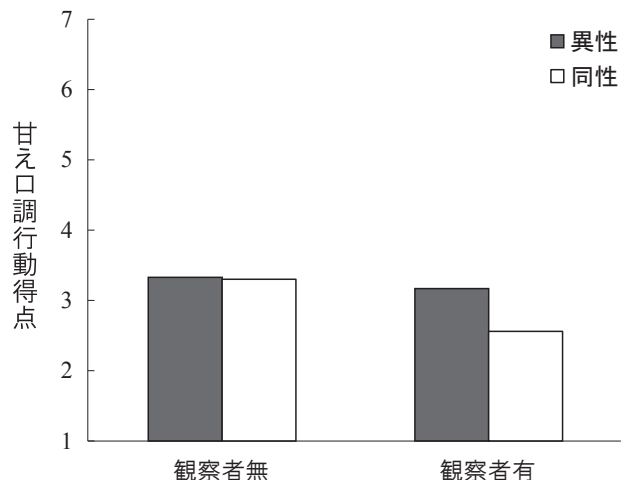
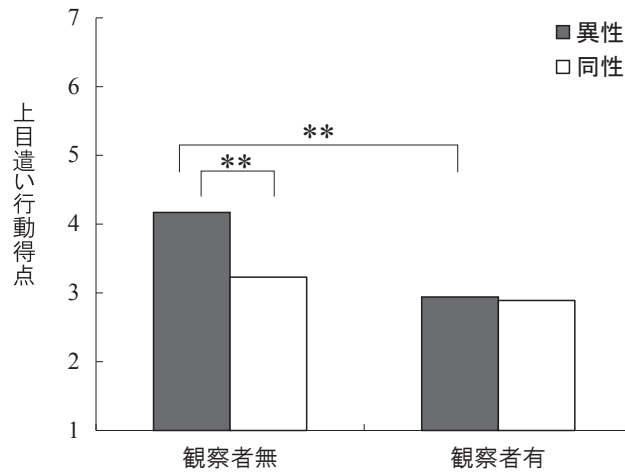


Figure 5 条件ごとの甘え口調行動得点の平均値

Figure 6 条件ごとの上目遣い行動得点の平均値 (** $p < .01$)

の結果、同性の観察者がいないとき、会話相手が同性のときよりも異性のときの方が、参加者はまばたき行動を行っていたことが分かった ($F(3, 99) = 126.23, p < .01$)。さらに、会話相手が異性のとき、観察者がいないときの方がいるときよりも、この行動をよく行っていたことが示された ($F(3, 99) = 79.63, p < .01$) (Figure 4)。

甘え口調 同性の観察者、会話相手の性別の主効果と交互作用いずれも有意ではなかった ($F(3, 99) = 1.02, n.s.$) (Figure 5)。

上目遣い 同性の観察者と会話相手の性別の有意な交互作用が見られた ($F(3, 99) = 5.72, p < .05$)。単純主効果検定の結果、同性の観察者がいないとき、会話相手が同性のときよりも異性のときの方が、参加者が上目遣いを行っていたことが分かった ($F(3, 99) = 36.67, p < .01$)。さらに、会話相手が異性のとき、観察者がいないときの方がいるときよりも、上目遣いをよく行っていたことが示された ($F(3, 99) = 11.59, p < .01$) (Figure 6)。

考 察

本研究では、同性の他者の存在が、魅力的な異性への外見的魅力に関する自己呈示に行動に及ぼす影響を検討するために、会話実験を行い、実験参加者の会話中の自己呈示行動について条件間で比較を行った。その結果、鼻にかかったような声を出す行動、まばたき行動、上目遣い行動については、会話相手と2人で会話するとき、同性よりも異性の会話相手条件で積極的に行われていたことが明らかとなった。これは、異性の会話相手に対して自分の外見的魅力を呈示するために、行われたと考えられる。一方で、異性と会話するとき、観察者無し条件よりも観察者有り条件の方が、鼻にかかったような声を出す行動、まばたき行動、上目遣い行動得点が低くなることが示された。異性に対して外見的魅力を好ましく呈示することは、同性の他者からは異性獲得の機会が妨害されるとみなされ、否定的な評価を受ける可能性がある。本研究の参加者は、次のセッションで観察者と会話や共同作業を行うという教示を受けていたため、観察者との将来的な相互作用の期待を持っていた (Gergen & Wishnov, 1965)。したがって、異性との会話場面に同性の観察者が存在する条件 (複数観衆条件) では、異性の観察者に対する外見的魅力の自己呈示行動を抑制したと考えられる。これらの結果は、魅力的な異性への自己呈示場面に同性の他者が居合わせる複数観衆状況において、人々の外見的魅力の自己呈示動機が低下するという先行研究 (笠置・大坊, 2010) と一致するものである。

一方で、語尾を引き延ばす行動、甘え口調行動については、条件間に有意な差は見られなかった。Strahan (1974) によると、甘えを示す行動は、相手との親密さが高い関係で行われる。本研究の話者と会話相手は未知関係であった。したがって、甘えに関連する語尾を引き延ばす行動、甘え口調行動が見られなかったと考えられる。今後は、親密な関係にある魅力的な異性への自己呈示場面において、甘えに関連する行動にどのような変化が見られるかを検討する必要があるだろう。

今後の課題

本研究の実験参加者はすべて女性であった。魅力的な異性から好意を持ってもらうために、女性は自己の外見的魅力を積極的に呈示するが、男性は経済力や資源の誇示、能力の高さの呈示に関連した戦術を取る傾向にあることが明らかとなっている (Buss, 1988)。したがって、今後は、男性を実験参加者とした実験を行い、同性の他者の存在が魅力的な女性に対する自己呈示行動にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする必要があるだろう。

また、本研究では自己呈示を行う話者と、観察者、会話相手がそれぞれ未知関係であった。しかし、日常場面では、既知の関係にある者同士の間で複数観衆問題が生起することも多い。先行研究では、話者と観察者、会話相手との関係が親密な場合、話者は観察者や会話相手に自分の個人情報やパーソナリティをある程度把握されているため、偽りや誇張といった自由に自己呈示できる範囲が狭まることが指摘されている (Baumeister & Jones, 1978)。今後は、話者と観察者、会話相手との親密性を操作した場合に、話者の自己呈示行動が変化するかどうかについても、より詳細に検討する必要があるだろう。

また、笠置・大坊 (2010) では、魅力的な異性への自己呈示場面に同性の他者が居合わせる複数観衆状況において、人々は自己外見的魅力を積極的には呈示せず、社会的望ましさや個人的親しみやすさの自己呈示を積極的に行い、異性と同性の他者両方に対して好ましい印象を与えようとしていたことが示されている。したがって、今後は社会的望ましさや個人的親しみやすさの自己呈示に用いられる非言語的行動を解明する必要があるだろう。

引用文献

- Baumeister, R. F. & Jones, E. E. (1978). When self-presentation is constrained by the target's knowledge: consistency and compensation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 608-618.
- Buss, D. M. (1988). The evolution of human intrasexual competition: Tactics of mate attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 616-628.
- Clark, C. L., Shaver, P. R., & Abrahams, M. F. (1999). Strategic behaviors in romantic relationship initiation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 707-720.
- Fleming, J. H. (1994). Multiple audience problems, tactical communication, and social interaction: A relational-regulation perspective. *Advance in Experimental Social Psychology*, **26**, 215-292.
- Gergen, K. L. & Wishnov, V. B. (1965). Other's self-evaluation and interaction anticipation as determinants of self-presentation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **2**, 348-358.
- Goffman, E. (1959). *The presentation of self in everyday life*. Garden City, NJ: Doubleday Anchor.
- 笠置遊・大坊郁夫 (2010). 複数観衆問題への対処行動としての補償的自己高揚呈示 心理学研究, **81**, 26-34.
- 笠置遊・大坊郁夫 (2012). 異性への自己呈示における複数観衆問題についての研究 平成19年度大阪大学大学院人間科学研究科修士論文 (未公開)
- Leary, M. R. (1995). *Self-presentation: Impression management and interpersonal behavior*. WI, US: Brown & Benchmark Publishers.
- Leary, M. R., Nezlek, J. B., Downs, D., Rad-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A. (1994). Self-presentation in Everyday interactions: Effects of target familiarity and gender composition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 554-673.
- Nezlek, J. B. & Leary, M. R. (2002). Individual difference in self-presentational interaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 211-223.
- Reis, H. T., Senchak, M., & Solomon, B. (1985). Sex differences in the intimacy of social interaction: Further examination of potential explanations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1204-1217.
- Rosenfeld, P., Giacalone, R. A., & Riordan, C. A. (2002). Impression management : building and enhancing reputations at work.
- Rowatt, W.C., Cuningham, M. R., & Druen, P. B. (1999). Lying to get a date: The effect of facial physical attractiveness on the willingness to deceive prospective dating partners. *Journal of Social and Personal Relationships*, **16**, 209-223.

- Schneider, D. J. (1969). Tactical self-presentation after success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **18**, 89-104.
- Schlenker, B. R. (1980). *Impression management : The self-concept, social identity and interpersonal relations*. Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Strahan, R. (1974). Situational dimensions of self-reported nervousness. *Journal of Personality Assessment*, **38**, 341-352.
- 谷口淳一 (2001). 異性に対する自己呈示方略に関する実験的研究—自己呈示ジレンマ状況における魅力度と重要度の効果—. *対人社会心理学研究*, **1**, 93-106.
- Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L. (1966). Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 508-516.

